



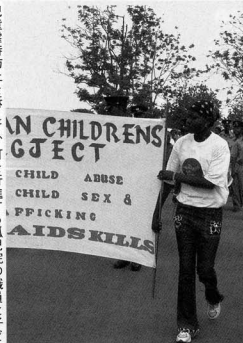
叔父・叔母、いとこ、祖父母といった大家族のネットワークが、HIV/エイズの流行により崩壊しつつある。最も働き盛りの年齢にある人々が命を失い、すでに貧困に苦しみ、病気の家族やあとに残される孤児の世話をする能力のない年配の人々に、負担がますます重くのしかかる。
©UNICEF Zambia

ザンビアへ赴任して数カ月の2002年3月、ザンビア政府がユニセフの支援で開催した「第3回 全国孤児と苦境にある子どもたちに関する会議」。政府・NGO・援助団体からの代表200人余りが出席する中、数人の孤児たちが体験を語り、早急な孤児対策実施を訴えた。華奢な身体ながらも、輝

！……偏見に傷つく子どもたち……

く瞳をもった11歳のフリーダが演壇に立った。小さい頃父が死に、母が病気となり、おじさんやおばさんの元で学校にも行けず、重い水波みやつらい家事をしながら暮らした時のこと。その人々が次々に死んでしまった後、お母さんの元へ戻ったこと。お母さんの容態が日々悪化する中、親戚の人は誰も助けてくれず、物乞いをして看病を続けたこと。ある晩、お母さんが泣き続ける中、助けを求めまわつてようやく来てくれた親戚の人は、タクシーを呼んで病院へ行くように頼んだ。「私はお母さんを抱きかかえて車の中に座った。おばさんは一緒に来てくれなかつた。『何の病気が知らないけれど、うつると大変だからね』と言って。私はお母さんを力の限り抱きしめた。病院に着く前に私の腕の中でお母さんは死んでしまった。私はその時8歳だった。どうしていいかわからず、何が起きているのか分からなくなるほど悲しかった。話しの途中、度々泣き崩れるフリーダ。それでも、止めることなく語り続けた。

彼女の体験談は、その後ユニセフの支援を受ける孤児院に引き取られ、周りの人々からの支援を受け、心の傷が癒され始めていること、母の死がエイズ関連であったことを知り、同じような体験に苦しむ人々のために働きたいこと、自分の体験談を語ることがエイズ対策への貢献となるならば、悲しいけれど語り続けたいことで締め括られた。出席者が息をつくまもなく、次は、両親が死んだ後、行き場もなく路上暮らしを始め、気がつくくと泥棒や麻薬取引の手先として使われていたという10代の男の子が語りだした。とにかく生きるために食べ物を与える人の言うことを何でも聞いた。聞かなかつたら殴られ続けた。何度か窃盗を繰り返した後、警察につかまり、刑務所での生活。その後、やはりユニセフの支援する孤児院に引き取られ、更正に励む。「悪い事はわかってはいたんだ。でも誰も助けてくれなかつた。他にどこへも行けなかつたんだ」



児童虐待防止を訴えて、町を巡遊する孤児院の職員と子どもたち。©UNICEF Zambia

こうした会議で語ることができる子どもたちは、何万人もいる孤児、逆境に生きる子どもたちのほんの一部にすぎない。性的虐待も頻繁に起きている。人口100万人の首都ルサカで、警察に届けられただけでも、子どもへの性的虐待は2003年に642件となった。この何倍もの性的虐待が届けられずにいると推測されている。

HIV感染率がおとなの人口の16%、1日に約350人から400人のおとながHIV/エイズ関連の病気で死ん

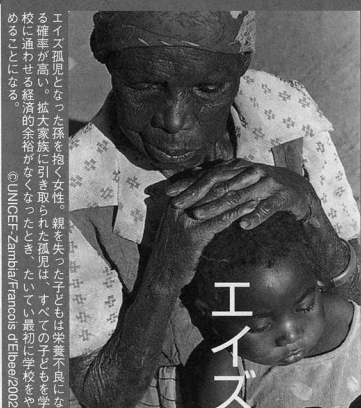
だ。HIV感染率がおとなの人口の16%、1日に約350人から400人のおとながHIV/エイズ関連の病気で死ん

父の死、母の死。ただそれだけでもとてもつらく悲しい出来事。誰にとっても。まして子どもたちにとっては。暖かい励まし、思いやり、身の回りの世話がとても重要で必須の時である。そんなときに周囲のおとなたちが、何の支えや励ましを与えてもならないばかりか、差別・虐待をするとしたらどんな思いだろうか？ 女の子はしばしば性的虐待も受けるとしたら。信じられないけれど、ザンビア・ユニセフ職員の私にとっては、言葉を絶するような逆境にさらされる子どもたちに出会うのは日常のことだ。

父の死、母の死。ただそれだけでもとてもつらく悲しい出来事。誰にとっても。まして子どもたちにとっては。暖かい励まし、思いやり、身の回りの世話がとても重要で必須の時である。そんなときに周囲のおとなたちが、何の支えや励ましを与えてもならないばかりか、差別・虐待をするとしたらどんな思いだろうか？ 女の子はしばしば性的虐待も受けるとしたら。信じられないけれど、ザンビア・ユニセフ職員の私にとっては、言葉を絶するような逆境にさらされる子どもたちに出会うのは日常のことだ。

父の死、母の死。ただそれだけでもとてもつらく悲しい出来事。誰にとっても。まして子どもたちにとっては。暖かい励まし、思いやり、身の回りの世話がとても重要で必須の時である。そんなときに周囲のおとなたちが、何の支えや励ましを与えてもならないばかりか、差別・虐待をするとしたらどんな思いだろうか？ 女の子はしばしば性的虐待も受けるとしたら。信じられないけれど、ザンビア・ユニセフ職員の私にとっては、言葉を絶するような逆境にさらされる子どもたちに出会うのは日常のことだ。

父の死、母の死。ただそれだけでもとてもつらく悲しい出来事。誰にとっても。まして子どもたちにとっては。暖かい励まし、思いやり、身の回りの世話がとても重要で必須の時である。そんなときに周囲のおとなたちが、何の支えや励ましを与えてもならないばかりか、差別・虐待をするとしたらどんな思いだろうか？ 女の子はしばしば性的虐待も受けるとしたら。信じられないけれど、ザンビア・ユニセフ職員の私にとっては、言葉を絶するような逆境にさらされる子どもたちに出会うのは日常のことだ。



エイズ孤児となった孫を抱く女性。親を失った子どもは栄養不良になる確率が高い。大家族に引き取られた孤児は、すべての子どもを学校に通わせる経済的余裕がなくなつたとき、たいてい最初に学校をやめることになる。
©UNICEF Zambia/Francois d'Ethebe/2002

エイズ孤児を救え！
ザンビアに灯る希望の光



※地図は参考のため掲載しただけで、地理的法的に正しいかどうかの正確さを保証するものではありません。

ザンビア 主要データ	
国名:	ザンビア共和国
面積:	75.3万平方キロ (日本の約2倍)
人口:	1,070万人(2002年)
首都:	ルサカ
5歳未満児死亡率:	192/出生1,000人中(2002年)
乳児死亡率:	108/出生1,000人中(2002年)
HIV/エイズとともに生きる人の推定数(0~49歳):	120万人(2001年末)
エイズにより孤児となった子どもの数(0~14歳):	57万2,000人(2001年末)

※国データは主に「世界子供白書2004」による。



フリーダが身を寄せる孤児院で、ユニセフが支援する被害者支援ユニットの創設を祝うセレモニーが開かれた。フリーダをはじめ、虐待を受けて育った孤児たちが、児童虐待防止対策の必要性を訴えた。
©UNICEF Zambia



いく中、孤児の数は急速に増え、現在の推定数は約80万人。2010年には、ザンビアは100万人もの孤児を抱えることになる予測されている。親戚の人々に引き取られる子、孤児院に身を寄せる子、ストリート・チルドレンとなつて路上で生き延びる子。その多くの子どもたちが、HIV/AIDSに対するスティグマ（偏見）からくる差別に苦しみ、虐待におびえる。あまりに大きな精神的なショックのため、孤児院に救われた後、何週間も泣くだけの子どももいる。何カ月間もまったく一言も言葉を発せなくなった子どもも。紛争の中で爆弾や銃で傷つけられた子どもたちと同じように、虐待を受けた子どもたちの心は傷だらけ、血だらけなのだ。目には見えないけれど……これは、一部にはエイズが奇病とされ、悪霊に取り憑かれた結果だとする誤った観念を持つ人々が多く、エイズで死んだ人、その子どもたちにはたとえ親戚であろうとも関わりたくない、触れたくないという態度につながっている。為である。あるいはHIV感染のほとんどが性交渉を通じて起こるため、多くの人々の間で、HIV感染イコールふしだらな節制の無い人間という考え方が強く、社会、家族、友人からの軽蔑・拒絶に繋がっているせいでもある。

希望の光

HIV感染者、その為に小さな子どもを残して死んでいくことを恐れている人々、孤児として残され苦境に陥らなければならないかもしれない子どもたちに、ここ1、2年、ようやく希望の光が灯った。ザンビアのような開発途上国にも、HIV感染悪化の速度を抑える効果のある治療、ARVが導入・実施され始めたのだ。適切な時期にARV治療を開始すれば、HIV感染者でも、10年も15年も、人によっては更に長く生き続けられるようになった。しかも、病人として生き続けるのではない。ほとんどの場合が、普通に仕事を続け、有意義な社会生活を送ることが出来る。国連の「子どもの権利条約」に基づいて子どもの定義を18歳までとすると、自分が感染したときに子どもが2、3歳であっても、15年生きれば「孤児」を残さずに済むことになる。その間に、できる限りのことを子どもにしてやれる。子どもたちが身体的・精神的に成長してゆくのを見守ってやれる。少しでも長生きすることが、孤児の数の削減に貢献するのだ。

このため、HIV感染者へのサポート、治療の普及が、ザンビアを初め、感染率の高い各国でHIV/AIDS対策の新しい焦点となつている。

しかし、すでに厳しい財政難に苦しみ、医療施設の整備も行き届かず、一般的に使用されている薬さえも在庫切れになりがちな状況にある中で、ARV治療の普及は決して容易ではない。ザンビアでは、2004年中に1万人の感染者にARV治療を提供するという目標を政府が打ち立てた。しかし、昨年末で治療を受けた人の数は3,000

0人弱にしか満たない。医療設備の行き届いていない点に加えて、先に述べたスティグマ、そして治療にかかる費用が大きな壁となつている。

ユニセフの支援活動

最近、世界保健機関（WHO）が掲げたARV治療普及の目標は「2005年までに世界で300万人に（95%）」だ。この枠内でのザンビアの目標数は2005年末までに10万人。現在の状況から、かなり大幅で急速な普及が要求される。

こうした中で、ユニセフは様々な形でザンビアのHIV/AIDS対策、エイズ孤児支援対策に貢献している。そのひとつは、啓蒙活動を通じてHIV/AIDSに対するスティグマを解決し、「否定・拒絶」の段階から「理解」、「認識・自覚」そして「支援・参加」へと人々の意識改革を促すための努力だ。特にユニセフは、ともしれば消されてしまいがちな、孤児、逆境にある子どもたち自身の声、HIV感染者で差別と戦いながら生きていく人々の声を支持し、政策決定者を含め、より多くの人々にその声が届くのを助けている。

もうひとつのユニセフ支援の分野はARV治療普及への支援だ。必要な薬の調達、医療保健に携わる人々のトレーニング、コミュニティが一体となつてのARV治療・精神的支援体制の確立、そして一番後になりがち、子ども、女性、貧困に苦しむ人々が平等に、必要に応じて治療を受けられる体制を唱道すること等がユニセフの主な活動分野だ。

Profile ●プロフィール



西本 伴子さん
(にしもと ともこ)
ユニセフ・ザンビア事務所

神戸大学卒業後、上智大学で国際関係論修士号を取得。UNDPのJPOとしてバルバドスに赴任した後、レント勤務を経て、スワジランドのUNDP常駐代表代理を務める。2001年ユニセフへ移り、ユニセフ・ザンビア事務所においてプログラム・コーディネーター、同事務所副代表として勤務。

※ザンビア政府が現在実施しているARV治療プログラムでは、現在月額8ドル、年間約100ドル。プライベートルームで治療を受ける場合は月額約53ドル、年間約640ドル。

ひとり当たりのARV治療のコストはここ1、2年で大幅に下がったとは言え、まだひとりにつき1年間最低でも100ドルかかる。財政難、多額の債務に苦しむザンビアにとつては、援助の増加なしでは到底賄えるものではない。ユニセフをはじめ、各援助団体が活発な援助拡大の呼びかけを行っている。



緊急食糧の配給拠点で、HIV/AIDSの予防を訴える活動がユニセフの支援を受けて行われている。地元の演劇グループ約200団体が、HIV/AIDSの予防と参加型アプローチに関する訓練を受けている。食糧の配給を待つ間に演じられる寸劇を通じて、HIV/AIDSに関する情報を伝え、予防の大切さや危険性についての話し合いを促している。WFP（世界食糧計画）の食糧が保管されている倉庫でリハーサルをする演劇グループのメンバー。©UNICEF Zambia